

《令和4年秋の特別講義を振り返る》

唐門復元工事『彫刻』の巻



内庭にある唐門は、令和2年(2020年)秋に復元工事が完成しています。令和3年秋、工事完成一周年の記念講演やパネル展示を行いました。

その第二弾として、令和4年の秋には『特別講義・彫刻編』と題し、「彫刻」にスポットを当てて、工事を担当された専門家お二人の講演、パネル展示を開催しました。

今年、ご参加いただけなかったみなさまにも、お楽しみいただけるよう、『彫刻』の内容をお届けします。

「唐門」ってどんな門？

小石川後樂園は江戸時代初期の寛永6年(1629年)、水戸徳川家の祖・頼房が、その中屋敷に造成を始め、二代藩主・光圀の代に完成した庭園です。

屋敷は、現在の東京ドームの辺りに位置しました。園内、東側にある屋敷の書院庭園(プライベートな日常的空間)を「内庭」、大泉水を中心とした部分が「後樂園」と呼ばれ、お客さまを“おもてなし(非日常的な空間での饗応)”するためにも使われました。「唐門」は、「内庭」から「後樂園」に向かう正式な入口で、ふたつの空間を分ける境界線の役割も果たしています。

「唐門」の創建は、江戸時代初期、明から亡命した朱舜水による扁額があったことや、施された彫刻の時代性から寛文9年(1669年)ごろ、水戸徳川家二代藩主・光圀の時代と推定されています。

「彫刻」の復元

唐門とともに焼失した彫刻は、焼失前の古写真や絵図から形状を推測し復元されています。

【井波彫刻】

今回の復元で彫刻を担当してくださったのは、井波彫刻協同組合のみなさまでした。

富山県南西部、南砺市北東部に位置する井波地区。ここで受け継がれてきた木彫は「井波彫刻」と呼ばれています。江戸時代中期、地元にあった瑞泉寺本堂再建の折、京都・本願寺より派遣された御用彫刻師に、井波の大工たちが技法を習ったのが、その始まりといわれています。代々、神社仏閣彫刻などで培われた技術は、明治時代、寺院などの欄間にも用いられました。昭和に入ると、堂塔建築とともに、住宅用欄間、置物、衝立、パネルなどに発展し、民間の需要も増加しました。

この彫刻に魅せられ、入門を希望する人々が続き、現在では200人を超える彫刻技術者が揃う全国一の産地となっています。

【彫刻の復元】

古写真をもとに、まず彩色担当者が線画を作成します。その線画をもとに、彫刻ができるよう、彫刻師が改めて下絵を作成します。その下絵から、モチーフの立体感を表現するため、厚さ3寸(約9cm)の板を使い複数の彫刻師で分業しながら彫刻を行いました。

彫刻は粗彫、仕上彫の順に進めていきます。粗彫では、鳥や松・梅などの形や大きさ・立体感などをおおまかに表現します。

今回は唐門完成当時(江戸時代初期)の彫刻とすることから、粗彫の段階で全体的にまるみをつけた形状とするよう、注意しながら進めました。

仕上彫は、それぞれのモチーフをなめらかに仕上げていく作業です。梅の花や瑞雲の形など、彩色に合わせて細部の形を整えていきます。今回は素地ではなく彩色で仕上げるため、葉脈や鳥の羽などは彫刻していません。彩色がしやすいよう、入念に打ち合わせを重ねながら仕上げを行いました。

彫刻は各段階で専門家によるチェックを受けながら進め、約11ヶ月かけて完成しました。



—正面欄間・妻壁彫刻—

妻壁彫刻は、古写真から、鶴らしき首の長い鳥が確認される。鶴は中国の山水画などにも描かれ、長寿や平和をあらわす瑞鳥であることから、中国趣味の庭園である後樂園にふさわしいモチーフとして採用した。

欄間彫刻の鳥は、古写真から尾羽の長い鳥であると想定されるが、二羽の鳥のうち、向かって右側の鳥の羽が短いことから、雌雄で尾の長さが異なる鳥であると考え、「三光鳥」の意匠とした。(東京都作成資料より)

【鶴(妻壁)】 天空を優雅に飛ぶ鶴は、別世界から人間界に訪れる霊長として、古来より崇められています。また、亀とともに、長寿でめでたいモノとされています。

【松梅】 松や梅は、古来より竹とともに「めでたい植物」とされます。



【瑞雲】 めでたいことの前兆として現れる雲は、瑞雲と呼ばれています。

【三光鳥(サンコウチョウ)(欄間)】 日本では夏鳥の三光鳥は、雄のさえずりが「ツキヒホシ(月日星)ホイホイホイ」と聞こえるところから、この名がついたといわれます。

—背面欄間・妻壁彫刻—

妻壁彫刻は、絵図に描かれる彫刻の鳥が赤・緑・黄色などの華やかな鳥であること、また類例としてもしばしば使われるモチーフであることから「錦鶏」の意匠とする。

欄間彫刻は絵画から牡丹とした。(東京都作成資料より)

【錦鶏(キンケイ)】 雄鳥は、赤、緑、黄、青、金色など、美しい羽色、雌鳥は褐色をしています。中国中央部の標高 900～1,300m に生息しています。世界各地に広まり、日本では、江戸時代から飼育されています。



【牡丹】 牡丹は「百花の王」と愛され、詩歌、絵画などの題材にもなっています。